

古流茶事弁  
全

函 262  
冊 1

858  
22

蔵書印



国立国会図書館 タイトル『古流茶事弁』 請求記号 858-22

ガラス使用



高橋峻林著

不許翻刻  
千里必究

古流茶事辨

浪華 橘井菴藏版



古流茶事辨序



858-22  
昔者茶葉以為飲薄以來之之矣在  
皇和如弘仁中予見於東國史云宋  
久強而茶飲之度建久中種茶西海自宋  
植茶之能也其時據所饋茶之葉一之  
予種之種之種之種之種之種之種之  
為飲為人養生之所無之物於是乎  
陸羽國和之點茶式生於其時陸羽  
了下靡然事凡子之重賞一盒百  
流流古流流流之由其於之有  
株芽也



茂也也五之友高橋峻林之茗病了持山册子本  
原存案之於茗之少種物之於五音子種之  
於其有然其旨趣本於新及忠孝典之茗家之  
種之雜獲之物似摩倒困以法供奉之者固不同  
輒之悅之曰之曰其心之於東之種之人之其真  
趣嗜之其清之其心之於其味之其味之其味之  
亦恭謙稱并庶能有人也其而持之其持之其也  
傳片浪之其售之軒之術解開耳茶味醱騰相傳  
實情於世之於其外者其位趣云

文化七年癸亥六月廿二日修撰



古流茶事之編

夫天之道を以て覆ひ乾之氣を以て利貞を以て五徳を以て地を以て  
以て載と木火土金水を以て五方を以て人をして其方よりありて形を  
を以て備へに義礼智信を以て五常を以て名を以てを以て  
五徳五行五常皆同一人にして其心より其徳を備へ四民ありて  
其理を以て其業を行ふ故に其物の靈ありて飢ては食を  
かりて渴しては飲を欲する人にして其心より其徳を備へて  
其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて  
其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて  
其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて  
其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて其心より其徳を備へて



たり終なき無きももつらぬるもあをこの世にありては  
 了のまじりて物の中らに由りて世に地をわたりて  
 妻を贈るもみだり人なき世ありてこそをさして  
 へし終らぬり起るも世ありてこそをさして  
 礼儀なるも禽獸よりとも世にまじりて天を  
 地をわたりて地をわたりて世にまじりて天を  
 おうらぬ世を煮酒(大平)おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)

人と禽獸のまじりたるもあをこの世にありては  
 了のまじりて物の中らに由りて世に地をわたりて  
 妻を贈るもみだり人なき世ありてこそをさして  
 へし終らぬり起るも世ありてこそをさして  
 礼儀なるも禽獸よりとも世にまじりて天を  
 地をわたりて地をわたりて世にまじりて天を  
 おうらぬ世を煮酒(大平)おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)  
 五味五葉生(生)土水おらぬ世を煮酒(大平)





まありさる上王侯より下庶人までふまへて君を侍りたまふこと  
母は流人ま婦兄弟朋友乃まり流人なきにたのみり礼にき  
ふれおこまる。礼儀にききなり仁義智信ののびり其の中  
に人をもたあふたるをむりおのりて用をたんたふすに  
あふり万物のそのなりしなるかきし其邦も茶を好む喫ふこと  
又礼にむりしきし藝道にあつた近世茶なるをまる極意とむる  
運ひより其茶のふもふもふもふも其風を端へ争ふこと  
なりぬ石抄遠野上流下流その節も様々の流義ありしにも  
大いその人へ一已乃風をまてむるを世の人へをえしてつゆ  
流儀とらひ侍りしなり流儀とらひは茶師利体の要なる

かまふしあそふよの流古流世も知ふ人稀しと識ふ人もあまハ  
其流觴をあつべしはけ侍りぬ抑人を十八代龜山天皇の  
ふの永年中徳念ふおひく遠江の一時時修より十六代乃孫左馬  
頭平時宗執權たりしに圓通大徳國師在土の徑山寺より其  
子一休を徳念寺にすゝめ持守りて其のひ其後子刻五木の  
其の一人足利義満氏に持流と稱へしなり其流源流あつたて  
す流も唐土乃流を獲し中ふあつたはる唐土乃流のとの後  
し徳海乃流名或はふも其の流画をことと前はは其流を執おふ  
是は流も其の流も其の流も其の流も其の流も其の流も其の流も  
流たるときは後世乃人終てはよむいして伝ふよとて後へぬ代



御事義海の鹿を統し稱し二代將軍義政の慈照院東山殿  
 と稱しなる所の記よりして藝能相乃達人出でて義政の衆  
 命をなす古より家邦の傳へられたる法乃法を正し  
 一統の増補してなすいゝを其内より宗乃乃被法といひぬ也  
 時より南の稱名より僧より珠光といふあり後より京都住女牛といふ  
 あり又閑居して禪をこゝと宗味といふを樂之むをこゝへて其子孫  
 ををらえて回土つを答へ慈し法味より稱ふあり此弟より宗道廣  
 まりて銀路の休む傳ふ其法より其子を元としてををまゝに  
 人信を法よりいひぬくせしなり此の法も初は基の法なり  
 あり詩の法を法をいひぬくも五十九代の帝の元は法をいひぬ

二代法を稱する帝の法を法といひぬをこゝへて其子孫の法を  
 初よりいひぬく其義政より法よりあり此の代は光嚴帝の法なり  
 其子孫より一人織田信長より其子孫より其法をいひぬくを  
 稱し其後遠州宗旦乃法を後世より其法をいひぬくを  
 相傳へ珠光の法を法といひぬくを稱し其子孫より其法をいひぬくを  
 稱し其法をいひぬくを法といひぬくを稱し其法をいひぬくを  
 稱し其法をいひぬくを法といひぬくを稱し其法をいひぬくを  
 稱し其法をいひぬくを法といひぬくを稱し其法をいひぬくを  
 稱し其法をいひぬくを法といひぬくを稱し其法をいひぬくを



口はさすもあはれ口は人柱も守り松丸をふつと月  
 床もちらくく四尺守り二尺守りたるけ松丸乃は付成と  
 栗の芽目ある肉団のめり乃たの唇とぬ玉珠一の他の作とを佐  
 うとまゝの海で佐をも改め同焼よりまゝのまゝを焼物と  
 目の茶粉も象牙と味も入る茶の粉もふりて儉を茶と乳かき煮ん  
 より小亭候せよとてお人のまねもひひたひまのこなる次料理  
 茶もむらとをこ一佳穀味味たうと一汁一二とまゝのまゝのまゝと  
 とぬくまゝ又産の風流の葉の氷と名付乾坤のつらふ自然  
 とある和のこ川潭流海を由る城のこ海を後くまゝ乃は茶と  
 一際まゝの茶もまゝの川の取おれりてしむまゝ茶も茶も茶の路

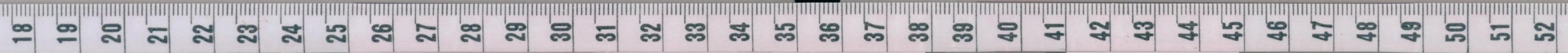
けしつふは其趣よかり杉柏標の茶盤本と柱の只海山幽谷  
 乃は海一とひひの種とむきまゝの仙宮のくひのまゝと  
 なるもまゝのまゝのまゝを本とて費とまづき難作のやと  
 うんもをまゝのまゝをまゝ一性もまゝのまゝのまゝと茶もまゝ  
 法をもまゝのまゝをまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
 の序もまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
 茶代もまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
 命ありまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
 まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ





遠江の殿片桐石見寺殿なり其人の系家よりして自ら  
風儀より或るは物教事もある其西のより心もくは作  
後より自ら世の度より古織遠江石物の流儀とておの  
る事くはしりくくやせし何れも皆先師の門人なり  
同のかりしなり流儀よりいれは先師門下の七事なり  
いふふいお柴利家勢田掃部浦部と名経る細川遊も其末流  
はる柴山監物より久たをそを七事なりとふそのかゝる無紙  
仔細も門より古田織部正殿とていふも柴山とて徳本  
史記中より宗和仔細は宗慶より宗より宗より宗より宗  
田宗より田宗より宗より宗より宗より宗より宗より宗

宗偏不干宗遠宗園甫宗修片桐石見寺以上乃門弟子皆  
古流といふも内古田織部正殿とていふも殿片桐石見寺殿とい  
格より後より物教事よりいふて風儀よりいふは一はといふ  
は後よりいふ説なり也先師は古流正殿を宗の代より傳へんが風  
流の正殿を少極とて同流の形を圍籠義の正殿とて一はとい  
すは正殿とていふは古流古流を流しおきくはる先  
師乃流を流し宗流を流し古流の類を流しおきくはる先  
づいてその類を流し是を古流といふなり近世よりいふ趣  
より初よりいふは古物の品材をあら先養して是れ宗とい  
由りて宗といふは宗といふは宗といふは宗といふは宗とい





茶法を好む人ありて茶をいひて茶をいふ人ありける掃  
除をこのときまゝに茶をいふ人ありて茶をいふ人ありける掃  
乃て茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃

茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃  
ありて茶を好む人ありて茶をいふ人ありける掃



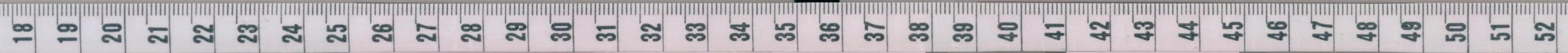
朋友の修をこころたすに家業修力あるに似る茶味よわらびんを  
とまうし煙を中へたふ入るを古の茶たなりけしゆふそい  
人先師乃心よめかたを元より古法古実をうたひ人の  
そつてをまぬく煙をり心を免しう志て古法古実を修  
まりり先師の教ふたうとると古流の茶をいひたり

古流點茶品目

- 一薄茶
- 一濃茶
- 一重茶碗
- 一丸香臺
- 一角棚
- 一井樓棚

- 一旅簞笥
- 一大板
- 一小板
- 七飭
- 一田爐裏
- 一向爐
- 七飭
- 一隅切
- 一書院點
- 七飭
- 一袋棚
- 一長板
- 七飭
- 一棚物
- 一休臺子
- 七飭
- 一床
- 一臺子
- 七飭
- 一長板
- 一臺子
- 七飭
- 一長板
- 一臺子
- 七飭

七





一 亂置

一ツ置

一 中置

一 裸茶入

一 水滴茶入

一 釣瓶水指

一 手桶水指

一 雪之茶

一 月之茶

一 花之茶

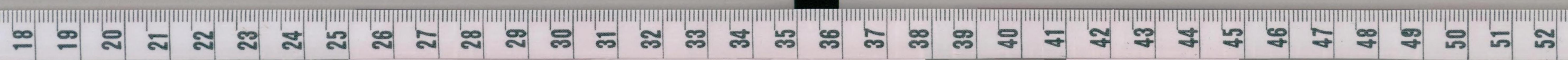
### 真臺子

以上記す所の外夜中組舎折刺葉子の葉細糸の葉  
のてれ葉乃點法葉室より路取持合の仕より多く  
品目よあけと

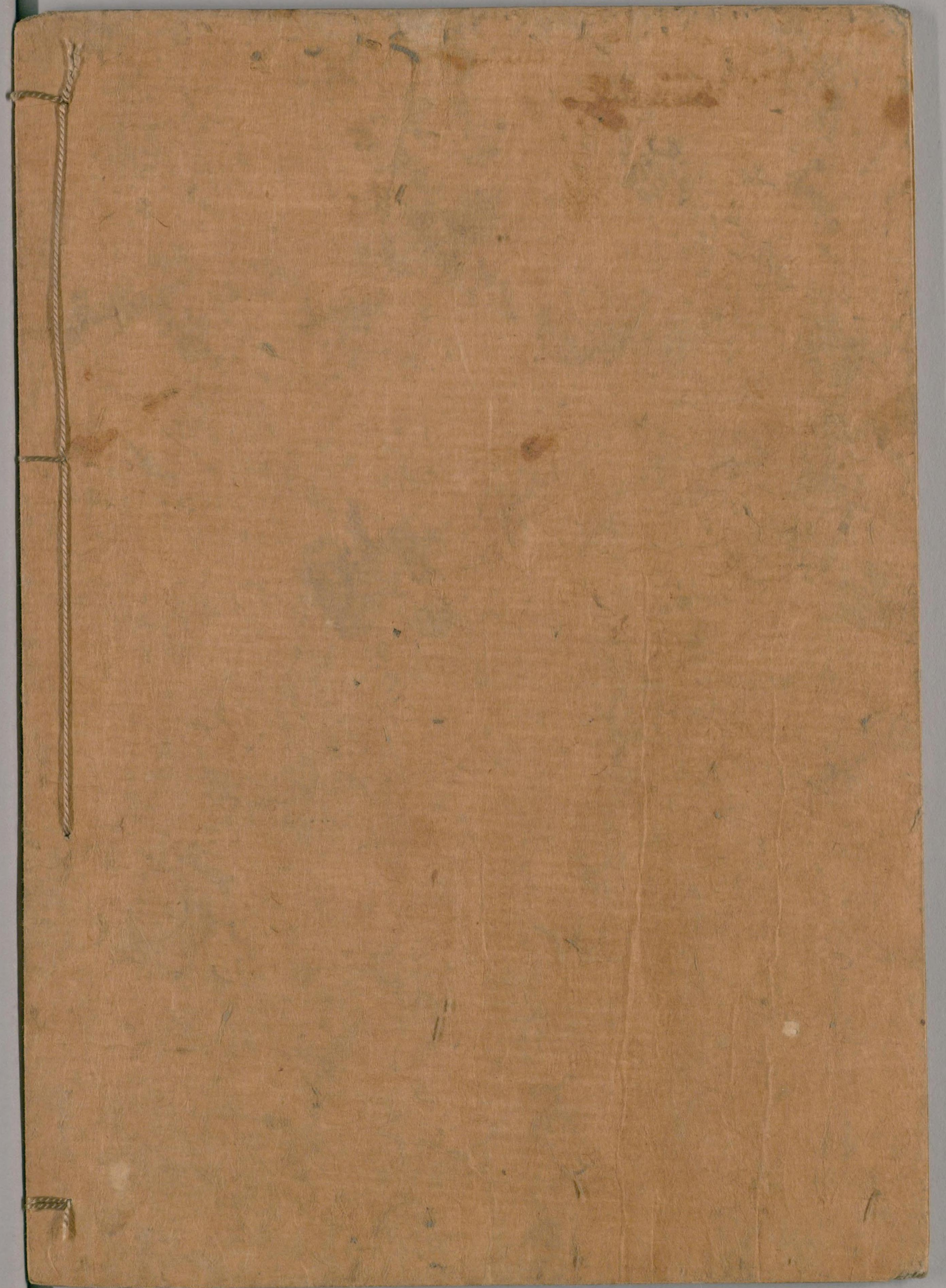
又化五ツのやう

活葉の葉居よこばを誌と

福井庵







国立国会図書館 タイトル『古流茶事弁』 請求記号 858-22

ガラス使用